

平成 元年 5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

多摩川の水質

青梅市内を流れる多摩川の清流を保護することは、文化財保護とはまた異なった大切な課題です。今回は、川の水質が、どのような条件によって変化するかを、人の生活と関係づけてお話ししてみましょう。川の水の中へは、自然のままでも、さまざまなものが入りこんでいきます。落ち葉、枯れたりちぎれたりした水生植物、さまざまな動物の遺骸などです。しかし、これらの生物のからだは、水中に生活している菌類や細菌などの微生物によって分解され、流されて姿を消していきます。このことを、川の自浄作用といいます。

しかし、下水など人の生活が出す排水（生活排水といいます）や、生物のからだをとり扱う工場（缶詰工場、精肉工場など）からの排水が多量に、また少量でも連続的に長期間川に流れこむと様子が変わります。水中の微生物による分解が間に合わなくなり、分解されずに残った物質が、水中の生物にとって有害な物質に変化したり、悪臭を発して川の水が汚れていきます。下の図は、筆者がかつて中学生と一緒に川の中の水生昆虫などの小動物の種類を調べ、そのことをもとにして推定した多摩川の水質分布図です。このことから、川の水質の変化の原因を考えてみましょう。

（ア）青梅市内を流れる多摩川の水質が羽村橋で悪化している。この原因は、玉川上水への分水である。水量の減少に伴い、水中の酸素の絶対量が減り、水中微生物のはたらきが弱まったためである。

（イ）福生市内での水質の低下は、污水处理場からの処理水の影響が大きい。しかし、平井川、秋川の流入で、川の復元力が拝島橋の水質からうかがえる。しかし、浅川より下流では、川の自浄作用を上まわる生活排水、処理水等の影響がうかがえる。

（文責 橋上 一彦）